

## 学位論文題目

### English Teacher Motivation in Japanese Secondary Schools: A Longitudinal Qualitative Study

日本の中学校、高等学校における英語教師の動機づけ：縦断的質的研究

氏名 末森 咲

動機づけは、第二言語習得研究において、最も盛んに研究が行われているテーマの1つであり、学習者の動機づけを中心に幅広く研究が行われている。学習者の動機づけを調査する質問紙の作成や(e.g., Dörnyei, 2009)、動機づけ増大、減退の要因 (e.g., Kikuchi & Sakai, 2016) について例えば研究が行われている。量的な研究が中心であるが、近年、ある特定の学習者に焦点を置く、小規模な研究も実施されている (e.g., Sampson, 2016)。このような研究は、インタビューを中心に行われ、質的に分析が行われている。

これまでの動機づけ研究における重要な結果の1つとして、教師は生徒の動機づけや学習成果に大いに影響を与えることが挙げられる(e.g., Dörnyei & Ushioda, 2011; Kikuchi & Sakai, 2016)。動機づけ増大、減退要因に関する研究によると、教師は生徒の動機づけ増大、減退要因の両者になりうることが示されている(e.g., Kikuchi & Sakai, 2016)。また、教師が教えることに対して高い動機づけを持つ場合、生徒は学習に対する動機づけが高まると言われている(Dörnyei & Ushioda, 2011)。このように、教師は生徒や生徒の動機づけに大いに影響を与えるが、動機づけ研究において教師に焦点を置く研究は非常に限られている (Mercer & Kostoulas, 2018)。よって、本研究では、教師の動機づけに焦点を置き、教師の動機づけ自体の理解を深めること、教師の動機づけと学習者の動機づけの関係性を理解することを目指し、以下4つの問いに基づき、研究を行った。

- 1 日本人英語教師は、教師の動機づけ増大、減退を引き起こすと考えられている要因に対して、どのような認識を持っているか
- 2 中学校、高等学校にて勤務するにあたって、教師の動機づけを構成する主要な概念は何か
- 3 教師の動機づけは、教室で行う授業とどのように関係しているか
- 4 教師の動機づけと学習者の動機づけは、どのように関係しているか

本論文は、8章で構成されている。まず1章では、教師の動機づけ研究の重要性を示した上で、本論文がどのように構成されるか、概観する。2章は、動機づけや教師の動機づけ研究と関連する先行研究を提示する。3章では、どのような研究方法を用いて研究を行ったか説明を行う。本研究は、縦断的質的研究であり、日本の中学校、高等学校にて勤務する日本人英語教師 (JTEs) 7名を対象に調査を行った。まず、半構造化インタビュー調査を、1名につき3-4回、1年間に渡って実施した。7名のうち2名、HarutoとJunに関しては、インタビューに加え、授業観察、フォーカスグループインタビューも実施した。授業観察は、計6回実施し、フォーカスグループインタビューは、Haruto, Junの生徒を対象に2回実施した。

4章では、2名の参加者に焦点を置き、動機づけ増大、減退の要因に対してどのような認識を持つか提示している。5章、6章では、それぞれ、参加者1名に焦点を置き、インタビュー、授業観察、生徒対象のフォーカスグループインタビューデータの結果を提示した。調査の結果として、教師の理想自己像が、教師の動機づけにおいて重要な要因となることが示された。教師は、理想自己像に基づき目標を持って

いるようであり、その目標に近づくために日々行動しているようである。教師の動機づけは、授業に反映されており、例えば、授業内における、日本語、英語の使用と関連しているようである。本研究はまた、教師の動機づけと生徒の動機づけが影響し合っていることも示した。教師と生徒は教室内外でのやり取りから、関わりが蓄積されているようである。関わりを積み重ねていくことが、教師と生徒両者の動機づけに影響を与えているようである。

その後7章では、本研究から見られた結果と問いの関係性を確認し、8章では、課題や示唆を提示すると共に、全体をまとめている。本研究の課題として、研究方法に関する点がいくつか挙げられる。まず、本研究の参加者は、他の質的研究と同様に、非常に限られている。参加者は限られているが、本研究は、インタビューに加え、授業観察、フォーカスグループインタビューを行うことで、教師の動機づけと学習者の動機づけの関係性を深めることにつながっている。また、ジャーナルやフォーカスグループによって、予定していたようにデータが集めることができなかった。ジャーナルに関しては、継続して取り組むことができる参加者が少なく、参考程度に使用した。緑中学校・高等学校にて行ったフォーカスグループでは、3月に実施した際は、参加者が1名となり、フォーカスグループというよりは、インタビューになってしまった。

このような課題も見られるが、本研究を通して、以下3点を示唆することができる。まず、教師自身が、教師は生徒に大きな影響を与えうるという点を学ぶことが重要である。教員養成課程、また研修において、教師の動機づけについて学ぶ機会を作っていくことが必要である。また、教員養成に携わる教員にとって、教員養成にて扱う内容が、将来の教師に大きく影響を与えうる点を認識することが重要である。教師は、教員養成にて扱われた内容に基づき、教える可能性があり、それが、生徒にも影響を与えるようである。3点目として、学校側が目標を明確にし、教師と共有することが挙げられる。教師は学校側が目指していることを理解できると、そのためにどのように貢献できるか、教師自身が考えることが可能である。一方で、学校側の目標が教師に伝わっていない場合、教師は、自身が教えたことと教えなくてはならないことの差に葛藤を抱く可能性がある。